

各関係機関の長 殿

福岡県病虫害防除所長

病虫害発生予察情報について(送付)

このことについて、病虫害発生予報第3号(6月)を発表したので送付します。

平成13年度病虫害発生予報第3号(6月)  
主要病虫害の発生現況及び予報の概要

【普通作物】

作物名	病虫害名	発生現況 ( 平年 )	発生予想 ( 平年 )
水稲	いもち病	-	やや多い
	萎縮病	-	少ない
	ツマグロヨコバイ	並	やや少ない
	縞葉枯病	-	並
	ヒメトビウンカ	並	やや少ない
	イネミズゾウムシ	並	並

【普通作物 - 水稲】

1 いもち病

( 1 ) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多い

( 2 ) 予報の根拠

気象予報では6月の平均気温は平年より高く、降水量は平年より多く、日照時間は平年より少ないと予想されている。

( 3 ) 防除上注意すべき事項

ア 苗いもちが発生した場合は、ビーム水和剤75の500～1,000倍液を1箱当り500ml灌注する。

イ いもち病の発病苗は移植しない。止むを得ず発病苗を用いる場合には、箱施薬を必ず行う。

ウ 補植用の置き苗は、葉いもちの伝染源になりやすいので早めに処分する。

## 2 萎縮病（ツマグロヨコバイ）

### （1）予報の内容

発生量：平年よりやや少なく、前年並

### （2）予報の根拠

ア 幼苗接種法による検定の結果、イネ萎縮ウイルス保毒虫率は0%（平年：0.85%、前年：0%）であった。（第1、2表参照）

イ 5月5半旬調査の結果、早期水稻における10株払い落とし成幼虫数は、平均1.36頭（平年：1.23頭、前年：0.63頭）であった。

ウ 休閑田におけるツマグロヨコバイの発生量は平年より少なく、畦畔及び小麦ほ場では発生を認めなかった。

### （3）防除上注意すべき事項

ア 前年に萎縮病の発生が多かった地域では、ツマグロヨコバイを対象に箱施薬を実施する。

イ 防除薬剤については「平成13年度普通作物病害虫防除基準」を参照する（以下の病害虫についても同様）。

第1表 ツマグロヨコバイのイネ萎縮ウイルス（RDV）保毒虫率<sup>1)</sup>

採集場所	接種 苗数	発病 苗数	保毒虫率(%)		
			本年	前年	前々年
福岡市西区金武	170	0	0	0	0
筑紫野市阿志岐	22	0	0	0	- <sup>2)</sup>
筑穂町大分	29	0	0	-	-
朝倉町菱野	178	0	0	-	-
田主丸町益生田	93	0	0	0	0.5
筑後市馬間田	200	0	0	0	0
山川町北関	192	0	0	0	0
黒木町木屋	194	0	0	0	0
北九州市小倉南区曾根	193	0	0	0	0
行橋市長井	200	0	0	0	-

<sup>1)</sup> 幼苗接種法による検定（第2表も同様）

<sup>2)</sup> 「-」は実施せず

第2表 ツマグロヨコバイのイネ萎縮ウイルス(RDV)保毒虫率の年次変動

年次	検定地点数	保毒虫確認 地点数	検定総虫数 (頭)	保毒虫率 (%)
1991	14	2	2,318	0.09
1992	15	8	2,555	0.62
1993	17	8	3,289	1.26
1994	7	4	1,186	3.54
1995	11	3	1,863	1.93
1996	7	1	1,317	0.08
1997	7	2	989	0.40
1998	8	2	972	0.50
1999	9	1	1,179	0.08
2000	10	0	1,252	0
本年	10	0	1,471	0
平年				0.85

### 3 縞葉枯病(ヒメトビウンカ)

#### (1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや多い

#### (2) 予報の根拠

ア ラテックス凝集反応法による検定の結果、イネ縞葉枯ウイルス保毒虫率は平均0.65%（平年：0.33%、前年：0.45%）であった（詳細は平成13年度病害虫発生予報第2号を参照）。

イ 5月5半旬調査の結果、早期水稲における10株払い落とし成幼虫数は、平均0.14頭（平年：0.09頭、前年：0.25頭）であった。

ウ 小麦ほ場におけるヒメトビウンカの片振り20回すくい取り成幼虫数は平均12.48頭（平年：39.49頭、前年：0.97頭）で、畦畔及び休閑田では発生を認めなかった。

#### (3) 防除上注意すべき事項

前年に縞葉枯病の発生が多かった地域では箱施薬による防除を行う。

### 4 イネミズゾウムシ

#### (1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

#### (2) 予報の根拠

5月5半旬調査の結果、早期水稲における50株当たり成虫数は平均2.79頭（平年：3.79頭、前年：3.94頭）であり、食害株率は平均49.50%（平年：42.13%、前年：30.75%）であった。

#### (3) 防除上注意すべき事項

ア 早期水稲では間断灌水及び中干しを徹底し、被害の回避を図る。

イ 早期水稲での発生が多かった地域では、早植え田における発生に注意する。

【果 樹】

作物名	病虫害名	発生現況 ( 平年 )	発生予想 ( 平年 )
カンキツ	そうか病 ミカンハダニ アブラムシ類	やや少ない 並 並	やや少ない 並 並
ナシ	黒星病 アブラムシ類	並 並	並 並
ブドウ	黒とう病 べと病	やや少ない -	並 並
カキ	炭疽病 うどんこ病 フジコナカイガラムシ	やや少ない 並 並	やや少ない 並 並
スモモ、モモ ナシ等	カメムシ類	少ない	少ない

発生状況及び発生予想は、前年までの8～9か年の平均値を平年値とした

【果 樹】

1 カンキツのそうか病

( 1 ) 予報の内容

発生量 : 平年よりやや少なく、前年並

( 2 ) 予報の根拠

ア 5月5半旬の調査では、発病葉率は平均0.1% ( 平年: 1.8%、前年: 0.4% )、発病ほ場率は11.1% ( 平年: 45.8%、前年: 15.8% )であった。

イ 気象予報では6月の気温は平年より高く、降水量は平年より多いと予想されている。

( 3 ) 防除上注意すべき事項

ベンズイミダゾール系薬剤の効力低下が一部で認められるため、効果が劣る場合は、別系統の薬剤に切り替える。

2 カンキツのミカンハダニ

( 1 ) 予報の内容

発生量 : 平年・前年並

( 2 ) 予報の根拠

ア 5月5半旬の調査では、寄生葉率は平均15.8% ( 平年: 10.3%、前年: 13.3% )、発生ほ場率は66.7% ( 平年: 47.3%、前年: 52.6% )であった。

イ 気象予報では6月の気温は平年より高く、降水量は平年より多いと予想されている。

( 3 ) 防除上注意すべき事項

ア 6月に高度精製マシン油乳剤を散布する。ただし、本剤は高密度時には十分な効果が得られないため、低密度時に散布する。また、落花期以

降にデラン剤を散布した場合には1か月以内に本剤を散布すると薬害を生じるおそれがあるので使用しない。

イ 雌成虫の寄生葉率30～40%を目安に防除の要否を決定する。

ウ 防除に当たっては、葉裏に十分薬液がかかるように心がけ同一系統薬剤連続使用は避ける。

### 3 ナシの黒星病

#### (1) 予報の内容

発生量 : 平年・前年並

#### (2) 予報の根拠

ア 5月5半旬の調査では、発病葉率は平均2.5% (平年: 1.2%、前年: 1.2%)、発病ほ場率は25.0% (平年: 23.3%、前年: 12.5%)であった。

イ 気象予報では6月の気温は平年より高く、降水量は平年より多いと予想されている。

#### (3) 防除上注意すべき事項

ア 同一系統薬剤を連用すると耐性菌が出現するおそれがあるので、他系統の薬剤とのローテーション散布を行う。

イ 罹病葉及び罹病果は摘除して園外で処分する。

### 4 ナシのアブラムシ類

#### (1) 予報の内容

発生量 : 平年・前年並

#### (2) 予報の根拠

ア 5月5半旬の調査では、寄生葉率は平均3.3% (平年: 6.4%、前年: 3.5%)、発生ほ場率は62.5% (平年: 47.1%、前年: 50.0%)であった。

イ 気象予報では6月の気温は平年より高く、降水量は平年より多いと予想されている。

#### (3) 防除上注意すべき事項

ワタアブラムシについては、合成ピレスロイド系薬剤の効果低下が認められるので、効果が劣る場合は別系統の薬剤と切り替える。

### 5 ブドウの黒とう病

#### (1) 予報の内容

発生量 : 平年・前年よりやや少ない

#### (2) 予報の根拠

ア 5月5半旬の調査では、発病葉率は0% (平年: 0.9%、前年: 1.7%)、発病ほ場率は0% (平年: 34.5%、前年: 15.4%)であった。

イ 気象予報では6月の気温は平年より高く、降水量は平年より多いと予想されている。

#### (3) 防除上注意すべき事項

罹病葉、罹病枝、巻ひげは伝染源となるので極力除去する。

### 6 カキの炭疽病

#### (1) 予報の内容

発生量 : 平年・前年並

#### (2) 予報の根拠

ア 5月5半旬の調査では、発病葉率は平均0.1% (平年: 1.0%、

前年：0.1%）、発病ほ場率は6.3%（平年：25.1%、前年：12.5%）であった。

イ 気象予報では6月の気温は平年より高く、降水量は平年より多いと予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

罹病枝は、伝染源になるので極力除去する。

7 カキのフジコナカイガラムシ

(1) 予報の内容

発生量 : 平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 5月5半旬の調査では、寄生葉率は平均0.5%（平年：0.8%、前年：0.8%）、発生ほ場率は18.8%（平年：27.1%、前年：43.8%）であった。

イ 気象予報では6月の気温は平年より高く、降水量は平年より多いと予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 比較的齢期が揃う第1世代幼虫出現期（6月3～10日）に1回目の防除を行う。さらに10～14日後に2回の防除を行う。

イ 本虫は、ヘタの下や葉と重なった果実の表面などの薬剤がかかり難い箇所によく寄生しているので、十分な薬量を使って散布むらのないよう

に防除する。

8 ナシ、モモ、スモモのカメムシ類

(1) 予報の内容

発生量 : 平年・前年より少ない

(2) 予報の根拠

ア 筑紫野市吉木の予察灯におけるチャバネアオカメムシの5月の28日現在での累計誘殺数は、12頭（平年：577頭、前年：1450頭）、ツヤアオカメムシの誘殺数は16頭（平年：159頭、前年：506頭）であった。

イ 筑紫野市吉木の集合フェロモントラップにおけるチャバネアオカメムシの5月の28日現在での誘殺数は、81頭（前年：1765頭）、ツヤアオカメムシの誘殺数は8頭（前年：170頭）の誘殺量であった。

(3) 発生予想

越冬量と今年のヒノキの球果の結実状況からみて、本年の発生パターンは後期発生型（8～10月）になるものと思われる。

(4) 防除上注意すべき事項

カメムシを対照とした防除の必要はない。

【野 菜】

作物名	病虫害名	発生現況 ( 平年 )	発生予想 ( 平年 )
夏秋ナス ( 露地 )	うどんこ病 綿疫病 ミナミキイロアザミウマ アブラムシ類	並 並 やや多い やや少ない	並 並 並 やや少ない
ネギ	シロイチモジヨトウ	並	並

【野 菜】

1 夏秋ナスのミナミキイロアザミウマ

( 1 ) 予報の内容

発生量 : 平年・前年よりやや多い

( 2 ) 予報の根拠

ア 5月5半旬調査の結果、寄生葉率は平均1.4%(平年:0.1%、前年:0.4%)であった。

イ 気象予報では、6月の平均気温は平年より高く、降水量は平年より多いと予想されている。

( 3 ) 防除上注意すべき事項

ア 周辺ほ場からの飛び込みが考えられるので、特に施設ナス収穫終了時期は注意する。

イ 多発生後は防除が困難であるため、発生初期のうちに防除を徹底する。

ウ 本害虫の各種薬剤に対する感受性が低下するのを避けるため、同一系統薬剤を連続して使用せず、数系統の薬剤を組み込んだローテーション散布を行う。

エ 薬剤防除については県野菜病虫害防除基準を参照する。農薬安全使用基準を守り、危被害防止に努める。(以下の病虫害についても同様)

2 ネギのシロイチモジヨトウ

( 1 ) 予報の内容

発生量 : 平年・前年並

( 2 ) 予報の根拠

ア 福岡市、行橋市及び朝倉町(2ヶ所)の5月3半旬~5半旬のフェロモントラップによる誘殺頭数は平均22.3頭(平年:20.2頭、前年:26.5頭)であった。

イ 気象予報では、6月の平均気温は平年より高く、降水量は平年より多いと予想されている。

( 3 ) 防除上注意すべき事項

ア 葉身に産みつけられた卵塊から孵化した幼虫はそのまま葉身内に食入し、内部から食害するため、卵塊や初期の被害葉は見つけ次第直ちに除去する。

イ 中齢以降の幼虫に対しては薬剤の効果著しく低下するので、早期発見に努め、薬剤防除は卵期から孵化幼虫期に食入防止をねらって行う。

【茶】

作物名	病虫害名	発生現況 ( 平年 )	発生予想 ( 平年 )
茶	炭疽病 もち病 カンザワハダニ チャノコカクモンハマキ チャノミドリヒメヨコバイ チャノキイロアザミウマ	並 並 やや少ない 並 並 やや多い	並 並 やや少ない 並 並 やや多い

平年値（過去10年間の平均）がない場合は、前年までの平均値を用いた。

【茶】

1 炭疽病

( 1 ) 予報の内容

発生量 : 平年・前年並

( 2 ) 予報の根拠

ア 5月中旬（1番茶摘採後）の調査では、病葉は認められなかった（1㎡当たり病葉数 平年：0.2葉、前年：0葉）。

イ 気象予報では、6月の平均気温は平年より高く、降水量は平年より多いと予想されている。

( 3 ) 防除上注意すべき事項

ア 摘採残葉での発生に注意し、萌芽から1～2葉期までに薬剤防除を実施する。

イ 本病原菌の各種薬剤に対する感受性が低下するのを避けるため、同一系統薬剤を連続して使用しない。

ウ 防除薬剤は「平成13年度茶病虫害防除基準」を参照する。農薬安全使用基準を守り、危被害防止に努める（この項は以下の病虫害についても同様）。

2 カンザワハダニ

( 1 ) 予報の内容

発生量 : 平年よりやや少なく、前年並

( 2 ) 予報の根拠

ア 5月中旬の調査では、寄生葉率は平均5.1%（平年：9.3%、前年：5.6%）で、50葉当たり寄生虫数は平均7.7頭（平年：22.2頭、前年：14.2頭）であった。

イ 気象予報では、6月の平均気温は平年より高く、降水量は平年より多いと予想されている。

( 3 ) 防除上注意すべき事項

ア 発生の多い茶園もあるので発生状況を調べ、寄生葉率が2%以上である場合は防除を行う。

イ 各種薬剤に対する本病害の感受性が低下するのを避けるため、同一系統薬剤を連続して使用しない。

3 チャノコカクモンハマキ

( 1 ) 予報の内容

発生時期：平年並で、前年よりやや早い



発生量 : 平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 5月中旬の調査では、巻葉は認められなかった(1㎡当り巻葉数 平年 : 0.0葉、前年 : 0葉)。

イ フェロモントラップによる誘殺数(4月1半旬~5月5半旬)は、筑後市では339頭(前7カ年平均 : 426頭、前年 : 442頭)、八女市では120頭(前年 : 169頭)であった。また、第1世代成虫の誘殺は5月5半旬から認められているため、発生は前年より1~2半旬早く、平年並と考えられる。

ウ 気象予報では、6月の平均気温は平年より高く、降水量は平年より多いと予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 巻葉後は防除効果が劣るため、巻葉がみられたら直ちに防除を行う。

イ 第1世代成虫の発蛾最盛期は、前年よりやや早くなる可能性が高いので、ほ場での成虫の発生に注意し、発蛾最盛期の7日後に防除を行う。

4 チャノミドリヒメヨコバイ

(1) 予報の内容

発生量 : 平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 5月中旬のたたき落とし法による調査では、平均0.1頭(平年 : 0.3頭、前年 : 0.2頭)の発生であった。

イ 気象予報では、6月の平均気温は平年より高く、降水量は平年より多いと予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

発生のみられない茶園もあるので発生状況を調べ、萌芽期にたたき落とし法(A4版白紙上)で4頭以上発生している場合は防除を行う。

5 チャノキイロアザミウマ

(1) 予報の内容

発生量 : 平年よりやや多く、前年並

(2) 予報の根拠

ア 5月中旬のたたき落とし法による調査では、平均4.7頭(平年 : 2.4頭、前年 : 4.8頭)の発生であった。

イ 気象予報では、6月の平均気温は平年より高く、降水量は平年より多いと予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

発生のみられない茶園もあるので発生状況を調べ、たたき落とし法(A4版白紙上)で10頭以上発生している場合は防除を行う。

## 6月の気象予報（1か月）

（予報期間 5月26日～6月25日）

2001年5月25日  
福岡管区气象台発表

### 【概要】

向こう1か月の平均気温は平年より高く、降水量は平年より多く、日照時間は平年より少ない可能性が大きいでしょう。

### 【要素別確率】

（単位％）

要素	低い （少ない）	平年並	高い （多い）
気温	20	30	50
降水量	20	30	50
日照時間	50	30	20

- < 1週目の予報 > 5月26日～6月1日  
この期間の平均気温は、平年並の可能性が大きいでしょう。
- < 2週目の予報 > 6月2日～6月8日  
この期間の平均気温は、平年並の可能性が大きいでしょう。
- < 3～4週目の予報 > 6月9日～6月22日  
この期間の平均気温は、平年より高い可能性が大きいでしょう。

### 参考資料

福岡における平年値

向こう1か月の平均気温、降水量、日照時間と1週目、2週目、3～4週目の平均気温

向こう1か月			平均気温（ ）		
平均気温（ ）	降水量（mm）	日照時間（h）	1週目	2週目	3-4週目
22.0	219.1	167.5	20.6	21.5	22.6

病虫害防除所では、病虫害の発生状況と防除について、ホームページとテレホンサービスでお知らせしています。アドレス及び電話番号は下記のとおりです。

ホームページアドレス

[www.jpnpn.ne.jp/fukuoka](http://www.jpnpn.ne.jp/fukuoka)

電子メールアドレス

[kfok0301@sp.jpnpn.ne.jp](mailto:kfok0301@sp.jpnpn.ne.jp)

テレホンサービス

092-928-6401（普通作・イグサ）

092-928-6402（果樹）

092-928-6403（野菜・茶）